



山本匠真
角田研究室

江戸川金魚養殖ミュージアム

敷地：東京都江戸川区
用途：養殖場、展示施設



背景

私の地元、江戸川区はかつて金魚養殖の日本三大産地に数えられていた。この街では現在、開発によって廃業する金魚養殖業者が増えている。加えて、昨今のコロナ禍によって全国的に夏祭りや縁日が中止に追いやられた。金魚すくいの機会の減少が金魚文化の衰退に拍車をかけ、一般家庭への金魚流通の主な経路が狭まったことで、金魚鑑賞の価値は忘れ去られようとしている。

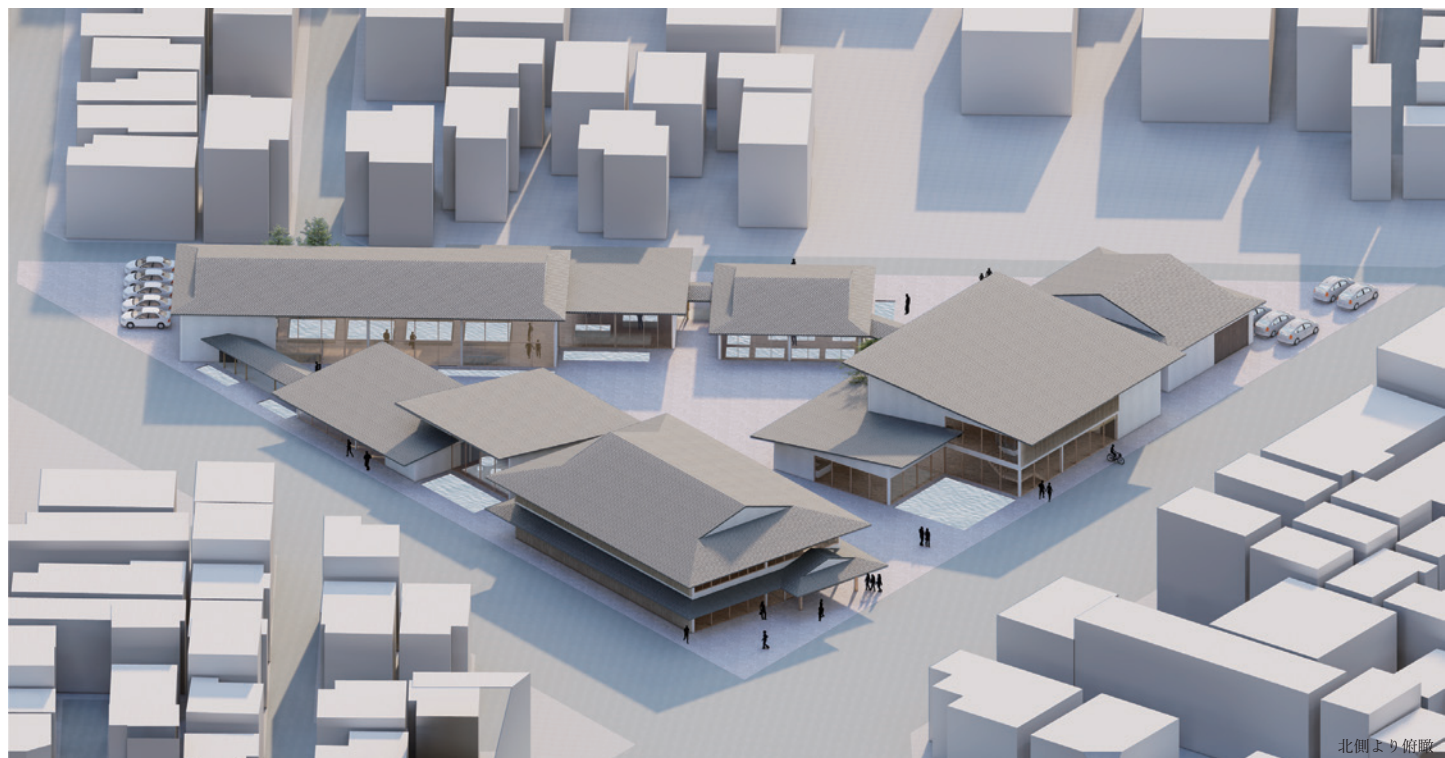
問題意識

このように、金魚養殖産業は衰退の一途をたどっている。開発によって生活が豊かになる一方で、伝統産業が薄れ、消えていって良いのだろうか。また、このまま金魚鑑賞の価値が薄れていけば、観賞のために品種改良されてきた金魚は需要の減少で行き場をなくしてしまう。金魚鑑賞の価値を再認識し、金魚産業がこれからも続くきっかけ作りが必要である。

敷地：堀口金魚養殖場

明治時代から続く、江戸川区を代表する金魚養殖場。1979年から開発で地価が高騰し、固定資産税が増加。広大な養殖池を埋めたり売ったりして今日まで金魚養殖場を続けている。結果、養殖場は規模が縮小。地域に対して閉ざされた空間となり、金魚養殖はブラックボックス化している。





計画概要

以上のことから、

- ①街に対して閉ざされた金魚養殖の生産過程を顕在化し、人々が伝統産業を知るきっかけとなる施設
 - ②人々に金魚の魅力・観賞の楽しさを発信する施設
 - ③養殖業者と金魚に優しい施設
- を目指して、養殖場・水族館・美術館の複合建築の設計を行なった。

①へのアプローチ

金魚の様々な生産過程をフェーズごとに分棟型のボリュームに分けて人々が養殖作業の間近で金魚を観察できるようにすることで、人々と金魚養殖との距離を縮める。これらのボリュームの間に設けられた廊下から広場や外部の賑わいが見えることで、養殖フェーズの移り変わりを体感する。

②へのアプローチ

金魚は一匹ごとに異なる色・形・泳ぎ方を持ち、見る角度によって様々な美しさが広がる。人と水槽の位置関係を上下させることで観賞時の角度を操作し、金魚鑑賞の魅力を周知する。

③へのアプローチ

金魚養殖では養殖フェーズが変わるごとに違う水槽に移す作業が発生するため、金魚の運搬が苦にならないような操作が求められる。1階に多くの水槽を配することで養殖業者の垂直移動を減らす。また、室外にも池を設けて日光で金魚の生育に良い緑色に濁らせる。弱った金魚や選別ではじかれた金魚が生を全うする場とする。建築外部にも金魚養殖が漏れ出すようになり、人々の興味を惹く。

